

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(1) 主婦にとつてふろは遊びとばかりは言っておれない。ガスぶろのない時代のわたしたちには、ふろを沸かすのは①そうとうに時間を必要とする家事だった。家族をつぎつぎにふろへ追い立てるのも楽でないし、遊びたがる幼児を洗ってやるのも疲れてしまう。湯冷めせぬよう叱りとばし、湯かげんを気にして②しじゅう焚口をのぞく。家族が入っている湯殿がしんとしている

と、どきりとして大きな声をかけた。

湯の中から、まのびした返事がする。

「ああびつくりした、沈んだのかと思った。生きてたの」

湯の音がしないで時間がたつと、どきりとするくせは今もってよくならない。ふろはくつろぎの時間だとは言っても子どもと入るふろは忙しい。わたしのそのころはまだ洗濯機もなく、入浴ついでにふろの湯で洗濯をした。子どもと遊びながら家事の一つが片付くからだだった。洗濯機が入っても、湯のほう汚れがよく落ちるので洗濯片手に入った。そして時に洗濯が長引いて肩を冷やしてかぜをひいた。

ふろに入るのは、ただあたたかな湯に漬かることにとどまらないのだ。そのことを世帯を持つてつくづく知らされた。水を入れて火を燃やし、湯かげんをみてほよい湯にととのえる。入浴、子どもの洗髪、着替、洗濯、そしてふろ掃除。

夕方になると炭坑町では炭坑住宅街ではなくとも、辻々に石炭の匂いが流れた。ふろの燃料が石炭だからである。石炭で焚くふろはなれないうちはなかなかむずかしい。焚口は戸外なので③炊事のひまに裏にまわる。焚口のそばに石炭置場をブロックを積んで作り、この中に小型トラック一台分くらいいれてある。この石炭を火をつけたふろ釜の中の割木の上にそつと重ねる。燃えている割木の火が石炭につくと、ぼう、とすごい火力で燃える。一安心であとは時々石炭を加えていく。気持ちよく燃えつつけさせるには、時折火を鉄の棒でつついて灰を落とす。わたしが苦心していると隣の元家主のおじいさんが手伝ってくれて、石炭の見分け方を教えてくれた。よく燃えるものを買わないと、灰にならずにこつこつに固まり、時間ばかりかかるのだった。わたしのような者はよくだまされて、水をかけて光っている低品位炭を売りつけられた。

隣のあるじは炭坑閉山後はゆつたりとすごして、いつもふろのたきぎをわたしの気付かぬうちにふるばの焚口に積んでいてくれた。④かいたいたした住宅の古材を割ったものだった。あの看板のふるばを作った人である。そのふろも建て直され、広く明るくなり、やはりこつこつと絶えず工夫が加えられた。

三十年代後半(一九六〇年代前半)は筑豊から石炭が姿を消した時代である。エネルギー革命

と言われ、民族大移動と言われて、闘争のあと炭坑労働者たちは苦しみつつ次の職業へ転じていった。四十年代（一九六〇年代後半から七〇年代前半）は輸入炭を買わねばならなくなった。わたしが隣の夫妻のあれこれとづく助力を受けつつ燃やしているふるも、そろそろ石炭以外のものへ替えねばならなくなっていた。

わたしは時折思い出す。

あれはまだ炭坑をよく知らぬ三十年代初期（一九五〇年代後半）のこと、炭坑住宅地の中の共同ぶろへ行ったことがある。⑤長屋造りの住宅が建ち並んでいるその先に、広い建物があり、男湯女湯とドアに書いてあった。この共同ぶろは鉱業所がボイラーを燃やし蒸気で沸かしているとのことで、高い⑥えんとつがあった。

ドアを押すと板の間の脱衣場が広がった。裸の子が走りまわり、女たちが声高に話しつつ脱いだり着たりしている。わたしをここに案内した主婦が、脱衣籠をとってくれた。わたしは四方に視線を走らせるゆとりがないまま服を脱ぎ、(A)そそくさと浴場へ行った。どこへ行っても見知らぬ人と見知らぬ⑦ふうしゅうに満ちている日本に気が安まらなくて、いつもまちがいばかりしている思いがする。それでも早くなじみたくて、用を作って訪れた炭坑住宅街だった。女たちは誰も彼も恰幅がよく、よくしゃべる。わたしには、この⑧そうおんの中で同行者と話しつつ湯舟に向かう芸当はまだまだ(B)至難のわざだった。つい無口になっているのが気になったが仕方がない。彼女がどこからか湯桶をもって来て湯を汲んでくれた。

浴場は⑨大音響の湯煙で何が何か落ち着いて⑩みわたすことができない。巨大な湯舟は円型のようにだった。なぜならどこかの⑪隅にしゃがもうと思ったわたしはそれらしいコーナーを見付けられなかったから。湯を汲んでくれた桶のそばにしゃがんだ。札を言う声など、聞こえはしないにぎやかさである。

突然、ざぶりと背に湯がかけられた。

「洗うちやろう。背中では自分ではよう洗えんもんね」

よくひびく声だった。肩に手をそえ、

「人にこすってもらおうと気持ちよかもんね」

泡立つタオルでごしごしと洗われ出した。連れ立って来た女ではない。彼女は湯舟に入ったところだった。わたしはふりかえることもできずに、「すみません」と言った。

しっかり力をいれて、ていねいに洗ってくれる。⑫脇腹も腰もお尻までごしごしとタオルは泡をとばした。

「洗うのも要領のあるもんね。撫でることそろそろ洗うたっちゃ音は出らんばい。音の出らにや気持ちよくなかもんね」

音？　と思いつつ、そうですね、ありがとうございます、と言った。彼女は石鹸の泡を流すとタオルをわたしの肩から背にひいたりと拡げかけて、その上からざあざあ湯を二、三度かけた。たっぷりと流れ落ちる湯が⑬快かった。

「ほら、音のしようが」

女がわたしの肩をきゅっきゅつと指でこすった。

やっとなわたしは首をまわし、こんどはあたしに洗わせて、と言った。

「よかよか、あたしやもう洗うてもろうた、上るところたい」

すたすたと上り湯へ行った。その後姿しかわたしは見えない。四十代かと思われた。

そこそこで談笑がつづいていた。(2)わたしが涙をこらえるほど、そのあけつひろげな抱擁に

心打たれていることなど誰も気付いていなかった。連れの女もなんでもないことと言う顔で湯舟の中から、その明朗な女に声をかけた。このごろあんた行きよるとね、と何かの話だった。

何十人の女子どもが浴場にいたろうか。わたしは少し落ち着きを得ることができて、そっと湯に沈んだ。わたしのまわりだけ水草が生えているように思えた。

炭坑の女たちと村の女たちはなんというちがいだろう、と、湯の中で思った。いや、女とか村とかではない。わたしは引揚げて来た母国になじもうと、これまでも苦心して人びとに近づいていった。地方語はなかなか聞きとれない。町でも村でも男女にかかわらず、新入者を彼ら特有の方法でじつとうかがった。正体が知れない者に心を開こうとしない。まず人びとは問うのだった。

「あなたのおくにはどこですか」

その問がわたしにはよくわからなかったのだ。すると「生まれは？」そう問い直し、「おとうさんの郷里は？ おかあさんのお里は？」

そう⑭尋ねる。答を聞いてようやく、少し心を開くのだ。その心模様は音のないスクリーンをみるようにわたしにはよく眺めることができた。この質問の正体は何か、と言うのがわたしの大きな主題となっていた。

炭坑で働く人びとにはそれがなかったのだ。どの何者とも知れない、うじうじとふるにやつて来た新顔のわたしを、ざぶざぶと洗ってくれた。そのふるでの些細なエピソードは炭坑の人びとの生活そのままだった。その心はわたしの家のふるばのたきぎにも通っていたし、わたしが未見への旅のように訪問してまわっているあちらこちらの炭坑住宅地に流れていた。

老いた人びとの話を聞いていてわかつてきたのは、大半の人びとが住みなれた村を糧を求めて出て、各地の炭坑を転々としていたということだった。その二代目三代目もいた。いわば古い村と別れて、人びとのいやがる地底の苛酷な職につき、各地から集まった者で新しい村を作り出したわけだった。第二の村づくりには血縁地縁の論理とは別のものが軸になっていたのだ。その論理を越えて直接個人の人間性にふれることがここでは大事だった。湯に沈んでいるわたしの心はいつまでも大きくゆれていた。あの人はわたしに(3)たいへんなものを残して消えた。音が出る背中に湯があたらしいのか、ひりつとした。

(森崎和江『湯かげんいかげ』東京書籍、一九八二年。平凡社版、一九九七年。一部を改めた。)

*著者略歴

森崎和江 もりさき・かずえ

記録作家。一九二七年、日本植民地統治下の朝鮮・大邱で生まれる。一八歳のとき、父母の郷里である九州の学校に進学し、日本での生活を始める。敗戦後、詩や文学のサークルに参加。その後、九州の炭坑、筑豊に暮らし、著作活動を始める。現在は福岡県宗像市在住。主著に『まっくら 女坑夫からの聞き書き』(理論社、一九六一年)、『闘いとエロス』(三一書房、一九七〇年)、『奈落の神々 炭坑労働精神史』(大和書房、一九七三年)、『からゆきさん』(朝日新聞社、一九七六年)、『慶州は母の呼び声 わが原郷』(新潮社、一九八四年)、『悲しすぎて笑う 女座長筑紫美主子の生涯』(文藝春秋、一九八五年)など多数。

問一 傍線部①～⑭の漢字にはふりがなをつけ、ひらがなは漢字になおさない。

問二 傍線部(A)「そそくさ」と、(B)「至難のわざ」を使って、それぞれ短文を作りなさい。

問三 本文中にある(1)「主婦にとってふるは遊びとはかりは言っておれない」とはどういうことか、本文の最初から破線……までの範囲を読み「主婦にとって」「売りつけられた。」「五〇字程度で具体的に説明しなさい。

問四 本文中にある(2)「わたしが涙をこらえるほど、そのあけつびろげな抱擁に心打たれていゝ」のはなぜか、一〇〇字以内で具体的に説明しなさい。

問五 ここという(3)「たいへんなもの」とは、どのようなことか、一〇〇字以内で説明しなさい。

問六 この文章は、九州の筑豊地方にあった炭坑の人びとの生活と文化について描いたものです。あなたの意見や感想を二〇〇字程度で自由に書きなさい。